

文献紹介

日本における周術期アナフィラキシーの全国規模前向き疫学調査

周術期アナフィラキシー(perioperative anaphylaxis : PA)の臨床診断には The 6th National Audit Project of the Royal College of Anaesthetists の基準(NAP6)などが用いられるが、必ずしも診断を確定させるものではなく、より正確な基準が求められている。また、PA では日本と海外で原因薬剤の頻度が異なるなどデータに解離があり、本邦での大規模疫学調査が必要とされてきた。

今回、著者らはPAに関する日本全国規模の疫学調査を行うとともに、新診断スコアを提唱した。本研究は2019年2月から2020年7月の間に日本の医療機関42施設で全身麻酔を施行された218,936例のうちNAP6 grade 2以上の55例を対象に行われ、臨床症状の記録に加え血清トリプターゼ値の測定、皮膚テスト(スクラッチテストや皮内テスト)、好塩基球活性化試験(basophil activation test : BAT)が行われた。新診断スコアはこれらの検査結果に基づき構成され、原因薬剤の特定は皮膚テストやBATの結果を基に行われた。

NAP6 grade 2以上であった55例のうち43例が新診断スコアでPAと診断され、全身麻酔における頻度は0.02%であった(43例/218,936例)。スコアの構成

項目では、皮膚テストの結果がスコアへの寄与度が高かった(感度91.4%、特異度100.0%)。原因薬剤の特定は55例のうち皮膚テストかBATが施行された46例で行われ、32例で薬剤特定に至った。原因薬剤の上位は、ロクロニウム(10例/210,852例)、スガマデックス(7例/150,629例)、セファゾリン(7例/106,005例)であった。

本研究は、PAの診断自体に新診断スコアを使用している点や欠損値の扱いなど統計解析手法に注意を要するが、PAの大規模な前向き疫学調査を行った意義は大きく、今後の研究加速につながる価値ある論文と言える。

Takazawa T, et al : The Japanese Epidemiologic Study for Perioperative Anaphylaxis, a prospective nationwide study : allergen exposure, epidemiology, and diagnosis of anaphylaxis during general anaesthesia. Br J Anaesth 131 : 159-169, 2023

(慶應義塾大学 堀川 弘登)